D'IO

身のまわりの近い世界を探検し終えて、子どもははじめて自分自身へと目を向ける。
ネメシスがこしらえた深い水たまりのなかで、あるいは家の洗面所の鏡のなかで、
子どもは自分の目のなかへ目を入れ、そこで別の誰かを見ていることに気づく——神を。
一瞬、あっけにとられて、虹彩の色のなかでさかさまになった自分を見つめる。
自分の瞳孔のまわりの、永遠に移ろう風景が、地球の外の風景を語ってきかせる。
茂みの陰の動物に、あるいは廊下で鳴る電話に気をとられて、
子どもは世界へ戻り、いま見たばかりのものを忘れる。
これほど近くにいる友だちのような神は、あまりに見つけやすすぎて、本当であるはずがない。
子どもは壊し、また建て、他人の目のなかに神を探す。そして大人になったいま、彼はふたたび自分の
目をのぞきこみ、自分の虹彩のなかに、クレーターに変えられ、ほかの天体との衝突に傷つけられ、いくつもの太陽に
あたためられ、あるいは内側へ崩れた星の死に凍らされた風景を見いだす。
ふたたび、大人になった子どもは神を見る。そして鳥肌を立てながら話しかける。あなたは誰か、自分はどこへ行けばいいのか、と。
神は鏡の向こうから間の抜けた顔でじっと見つめるだけで、何ひとつ答えない。大人はひとりごとを言っている気がする。
泣く赤ん坊が、あるいは鳴る目覚まし時計が、大人を世界へ連れ戻す。
答えない神は、耳の聞こえない神であり、意地の悪い神であり、存在しない神である。
やがて年老いた大人は、ある朝、顔を洗いながらふたたび自分自身の前に立つ。
自分がそこから来て、そこへ帰ろうとしている、その目のなかの地球外の風景は、また変わっている。
そこに住まう神は、花の絡み合いと、神話の獣たちの影と、色とりどりの毛糸玉の虹のあいだで、平然と彼を待っている。
子どもだった者、男になった者、老人になった者は、自分の目のなかで D'Io に——神と「私」に——会いに出かけるのだ。

Luca Motolese · Alassio 2008

motolese.com — 原文はイタリア語